

唐の白居易は、皇帝自らが行う官吏登用試験に備えて一年間受験勉強に取り組んだ。その際、自分で予想問題を作り、それに対する模擬答案を準備した。次の文章は、その【予想問題】と【模擬答案】の一部である。

【予想問題】

書き下し文

問ふ、古いにしへより以来、君たる者其の賢を求むるを思はざるは無く、賢なる者其の用を効いたすを思はざるは罔なし。然れども兩ふたつながら相遭あひはざるは、其の故は何ぞや。今之を求めんと欲するに、其の術は安くに在りや。

現代語訳

質問する。古来、君主は賢者を登用しようと思っており、賢者は君主の役に立ちたいと思っている。しかしながら、双方が出会わないのは、その理由は何か。それを求めようとするのに、方法はどこにあるのか。

【模擬答案】

書き下し文

臣聞く、人君たる者其の賢を求むるを思はざるは無く、人臣たる者其の用を効すを思はざるは無しと。然り而して君は賢を求めんとして得ず、臣は用を効さんとして由無きは、豈に貴賤相懸あひへたたり、朝野相隔たり、堂は千里よりも遠く、門は九重よりも深きを以てならずや。

臣以為らく、賢を求むるに術有り、賢を弁わきまふるに方有り。方術は、各おの其の族類を審つとらかにし、之をして推薦せしむるのみ。近く諸これを喩たとへに取れば、其れ猶ほ線いとと矢とのごときなり。線は針に因りて入り、矢は弦を待ちて発す。線矢有りと雖も、苟くも針弦無くんば、自ら致すを求むるも、得べからざるなり。夫れ必ず族類を以てするは、蓋し賢愚貫くこと有り、善悪せむから倫有り、若し類を以て求むれば、必ず類を以て至ればなり。此れ亦た猶ほ水の湿に流れ、火の燥に就くがごとく、自然の理なり。

現代語訳

私は聞いております、「君主で賢者を求めることを考えない者はおらず、賢者で君主の役に立とうと考えない者はいない」と。しかしながら、君主は賢者を求めても手に入れられず、臣下は役に立ちたいと思っていて方法が無いのは、貴い者と賤しい者とが混ざり、朝廷と民間とが隔たり、君主の執務所は千里よりも遠く、王城の門は九重よりも深いからである。

私が考えますに、賢者を求めるのに方法はある。賢者を弁別するのにも方法がある。その方法は、それぞれその種類を明らかにして、推薦させるだけである。これを身近な例でいうと、ちようど糸と矢のようなものです。糸は針によって(布地に)入り、矢は弦によって射ることができる。糸や矢があるといっても、もし針や弦がなかったら、役に立とうとしても、果たすことはできない。そもそも賢者と愚者とは貫かれているようにそれぞれまとまっており、善と悪

とはそれぞれ集まっております、類で求めると、必ず類によって到達する。これはまた、水は湿つたところに流れ、火は乾燥したところへと広がるように、性質を同じくするものは互いに求め合うのが自然の摂理である。